三七全傳南柯夢 三

122
77
24

南柯夢才

笠屋三勝赤根半七
節操全傳

第三ノ巻

編者 曲亭畫匠北齋
新研菓子

東京圖書館
和書門 小說類 二六函 一架 四七號 一七冊

三七 全傳南柯夢 巻之三

東都　曲亭馬琴編次

明治十年交換

臥房の胡蝶

光陰矢のごとく。又梭のごとく。秋去春来たりて。蟻松典膳が女児園花は。既よわ
ちけり。父の典膳は。豫ねて赤根半六が一子半七を。女壻よすなわち準備のことをなす。主君続井順昭へ。ひそかに被親するを吹挙し。
ある日人うんぬん。半六五條の村主を兼ねて。ユヲ半露ならず。私
加之兄弟半七は。文武の才藝人よ超たり。僕日来その奉動をうんぬん
小。近習に召使れて。ぞうるべきの秋。夫俊徳を明すと。能を養ふ
矜のよい君のこころよりぞうれども長流私横つく。渡すのあく
も又燕石よ芳をうん。賢を薦るの愚臣が微恵を。用ると用ひ

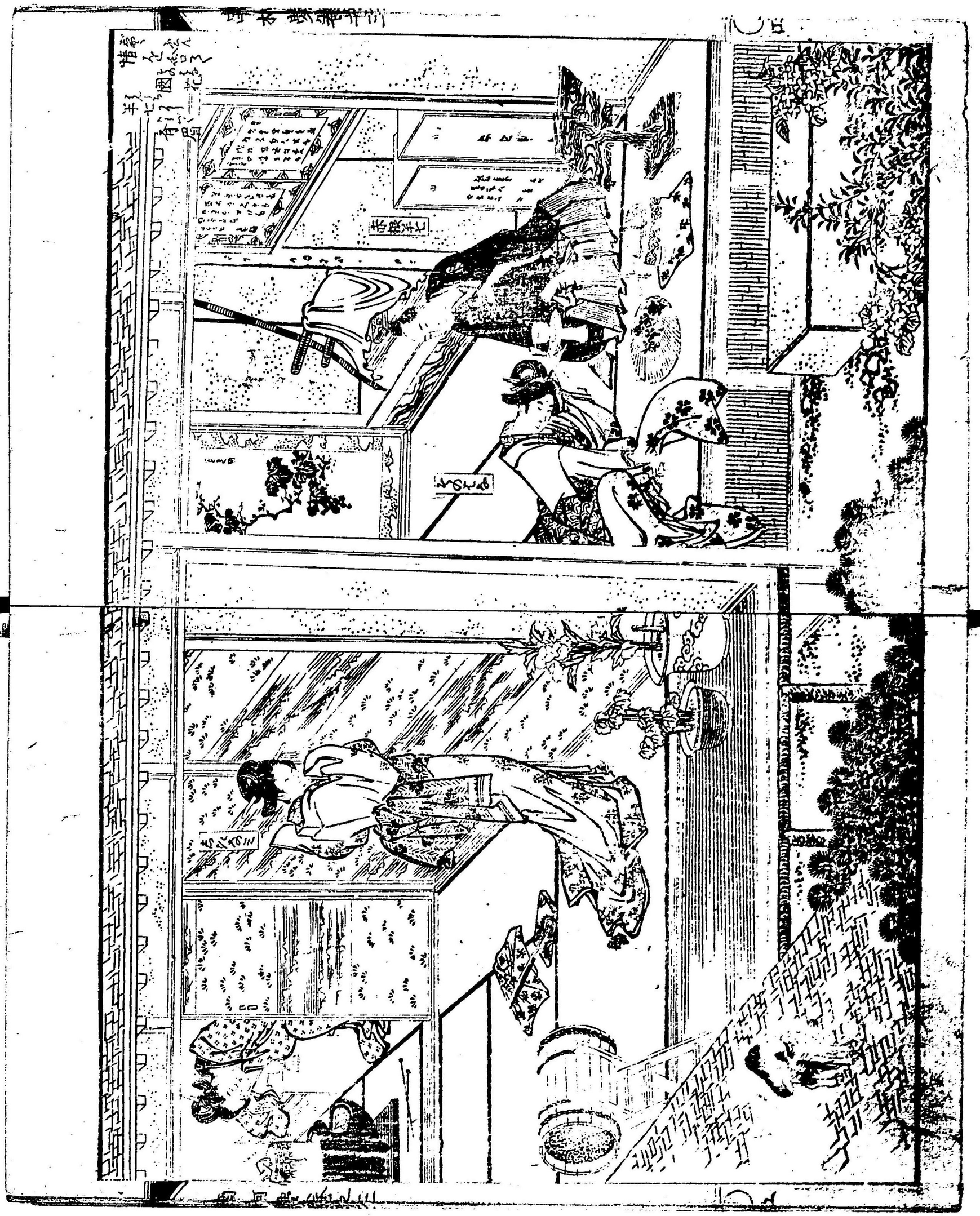
とゝ。尊慮ようさるべうりやと言語を竭くせえあぢうべ順昭これを諾なひて。するのち半六よ五條の縣守を兼ね。新よ半七を召せて。嫡子よ吉雅を の近習ようぞ召使れる。典儀員顕員の佐佐をとりて。彼艶子を仮引すとゝ。ども。半七げひざよ怜悧て。忠孝抜群なるゆそ違ひどそのゆ体をつへて。老臣もこれが為よ妻主君もこれよ對じて。容を改ると妻うりさようふと。半七ゝ。程もなく近臣の上よすゝと。職禄忽ち父よ起たり。続井の家隷妻うる中よ。文武の道よひを委ね。忠信ゝ今ゝうるのゝ。百よ倉ゝ詩を失友春と。赤根半七とのゝたえて宿を出る人の。なるよ半七。今茲四月ゝ二十七うりて。年紀をりて論ぜるとゝ。百よ倉ゝも勝をりとて。ひのりのゝれを称讃ざるゝうりとぞ。ゝとその年の終よ。蟻松赤根の両臣その子の婚縁を主君へ願ひまり。明春園花を嫁らして。秦晋の好を締んとて。媒妁の男をうらゝ送ゝの用意をうんいゝるゝ。半六ゝ。ゝるよを。ちゝ招ゝとりのゝ蟻松氏ゝ親ようの恩人ゝり。既よその蔭を蒙ると久ゝ。備彼人の吹挙よりゝゝ。ゝれも。山見ゝゝ杓果ゝ。ゝれゝ。此度最愛の女児をりゝ。身よ妻ゝんと宝ゝ。今日ゝ珠ゝ。吉日ゝれゝ双方の願書を上ることゝ。ゝ半七ゝ。ゝ父の顔をうゝ瞻て。仰ゝゝ。某ゝ母の遺言ようゝ。ゝんと婚縁を結びゝゝ。彼不幸ゝと猛獣小御去らゝ。ゝりとゝ。今よ侍ゝ死ゝゝ。方よ一つも彼女ゝ。ゝゝ。母の送言よ悖るのゝゝ。彼よ對ゝと不義ゝり不信ゝ。男ゝ。ゝゝ室ゝりとゝ。妻を娶ゝゝ。遅ゝ。ゝゝ。回答ゝゝよ杜。ゝも。果ゝよ。半六忽ち気ゝ変ゝ。ゝ。

とひとくーくん。ぶくくとうち笑ひ。自身らの不理なる似たれどとうふ迂遠しぃ。今
より干とぉさんぐらくよめる成さーあ成てくこの婚縁を結ぐ不義うりぃろよちん。彼
荒熊よとくーくん。その屁を索りけるどとくくぐぐや八九年音耗うしぃ。拓たる采よ
荒い冥ともぐくれが存命と帰宅来ん日ぃりともぐぐえどさくを假初の
義理よ鶴ぐれ。女子の為よ孫の後栄をありざるの愚じ。且上世るぃ人
究くく命長しぐこのもるよ三十うと娶るとも逆うぐぐ降れる世いちくーど。
人生五十年。七十い稀ぐぐ。くくりるを生ぐされが。父母衰老くく。そのよと
教るよひ由りどぐ。れ子孝向ちくくれが。和漢の故實ちるれべ。ちくれどもそ
い枝子定規ぐりぐよめくくれそ。ぐくらんぐぁさん憎しくくこの婚縁を結
ばちんぐぐ。ぐぐ思慮しと。悲ひとりのひそとりのひよ。半七いるの母氏を低粉
の間よよをさくくん。黙然とくと居たりしが。四もくくりぐぐれ。慈のりんぐり

ぃぐくくとめくど。信義の係ることろぐるもまくう。公夏よ中くぐーと。推家
よのるれ生くりるの恥ぐり。況くく一の宿老の婚とりくく。肩を聳さんそ
嗚呼ぐくく。人の貧富い天ぐり今くぐぐぐや生涯薪を撫て世をくくるも。び
清くい。朱買臣るも羞べくぐ。死灰の人よ愛ぐられ。愛られざるよちび。銅
臭を義くく好を辯ぃ。禍の端ぐり。そびくく今ちくくれをのくとりのを半六ぐ
もあどぐ。大よ赤くく声をあり文やをれ半七。世貿ぐちぐ。ちぐ育よ悔る。母の
遺言のくくを重しと父を否しぐ。さくぐうるる義理よ鶴ぐくく。親よ愛を失ぐとる。
何の書よ記くくるぐ。くくん一旦蟻松氏よ約諾くくぐ。この婚縁を定くる。
今怨ぐくくれを破くくぐ。彼人豈だぐよ止んぐとれとと大ぐる禍の端ぐれ所詮
彼人よ憎ぐとぐ親よハ結ぐと。是非よ分ぐどとりてくれて。面を赧ぐ
又蒼くくり。猛よ力を引提ぐぐ。外面くくり出んとる成。半七忙くく脊を

仲
と縛の袂を引とゞめ。ぢん憤の甚しかれども。家の為をおもひとあれば。
ゆきまゝよ。ぢんこゝろ引諫ゝ聽ざれば。姉哭〻と從へとの奉丈の呼ぶ
ゆ意の隨まとゆりうん。固辭ゆづ。固辭ゆづ。とまらとよどず六ゆ〻
気ゐをわづ。ゆまるゝ〻ゆ仔細よ及ばどうが家の幸福とわよんべ。
汝日未の怜悧よ似ぜおぞうのよ〻ひ惑ひ〻ゆ年の弱ゆ故よとゆよ
ゆ婚姻整ひるゞ。夫婦睦〻と。閨房姑よ愛とられ。立身の階梯を緒み
殺そとらのよ。年七ゆ畏〻と。仰うけゆりひゆ。ゆとうべと應〻ゆ父ゆ
大よ歎〻。ゆ〻この日願書をかく。年七ゆ婚縁のゆとゆえゆゆ祝よ。
その年の終よ。双方故ゆ主君の詩を稟。婚姻ゆ正月の中旬と定
め〻。ゆゆ聘礼をこゝろゆ。ゆさるゆ〻よ年六ゆ。屋棟を菅更さ。塚を
塗ら。帷薦の面坡新よさ。紙幔を貼ゝとするゆゆゆゆ短ゆ冬

の日を。ゆいと〻暮〻ゆ。又蠟燭が家ゆ。園花が衣服調度の儲小黄
金を費。ゆゆ〻美を盡さゆとゆゆ。ゆ徒よ冬も果てゆ〻みの年
のゆゆめよゆりよゆれゆ。典拠夫婦ゆゆゆゆゆよゆゆゆゆ。黄道吉日を卜ゆ。既ゆ
婚姻の日よもゆりゆ。園花ゆ大轎よ駕らんとするとゆ。數俵ゆ女児よりゆ
ゆ。婦ゆ三男よ産ゆ。百年の若も。又樂も。ゆ他人よゆゆする者ゆゆ。
ゆ茅頂よ〻。妬ゆを。恒のゆとよとゆ。物の本ゆゆもゆりゆひゆん。
されゆ初ゆとゆゆ父母よ從ひ。成長ゆ〻ゆ夫よ從ひ老ゆ〻ゆよ從ゆゆゆゆの
三從ゆゆゆもさ〻。ゆりの障もゆりとゆゆゆゆゆゆの女児と愛ゆゆ。親の權
威を笑よ被ゆ。夫よ倦ゆゆよ。一ゆゆ夫の衆を生ゆゆ。西復水盆よゆゆゆ。
化〻ゆを慎ゆ。誠を碧〻と弄ゆ。やゆ〻と教諭ゆゆ。園花ゆゆゆゆ。
さゆゆゆ稚ゆより汝が夫ゆと。ゆゆえゆゆゆゆゆゆ髪も看ゆゆ。かく



まろう眉のをのごう等閑よ作るべし。ちや弟の黒うのうしう踈うとも。
生れく彼処を出んとの。どく作くどとりの。後悔さもとそ。とう后況つ
目送とくう。かくて園花五條よ勅た。婚姻障ることもるく整ひつ。洞房花燭
の景迹いくくしさよくまの省れくいるど。園花い稚ひう。えうつくれ
うて。生らろつれくしよりの。くすくでいところふ誓ー嬪夫うくよ。年紀い二八
の春うと。容止いと艶妖よ。ひざよいと怜悧うれ。又年七い今茲ー才うて。
顔色の端麗なるう。梨花の雪ども敗くべく。文武よ宏才うるうい。竹林の
孫ふもうるべ。往古うう佳人いすよ因ひ。駿馬い伯樂よ遇ひど。ひくう
夫婦い實よ天縁ありとて。或い義く。或い妃くとりのも妻う。赤根が
家よ。帰寧男入の吉席よ日敷延く。夫婦うんくー睦くくえくー。
興拓も敷倆ちう。婚を擇ねたくとく。終ひ王限ア。安倆いをりく

五條いかくをのがのうしとうくくる。世の中の親ぐろ。ひくくうことあくあ
うよ。年七い父の命よ恃ひくくて。此度婚姻いうーたれどもうんが生れを定
ず。縦駿の手い移るとも。他ー女るうたを殺さ。とひくくうれば。を花
を娶ことたえく。久もひうよ睦らどうれいとく又強面気をいうんどど
して。盃い深さくよ他るくく相語ひ。中とるとうら席隅くくど。食するとう
い折布ひくくと睦くくえうほどよ。ま六いとの秋熟よ。ちわく。階よ跡ひ。
うぶくくぶめの言葉うい似ど。園花と雅ろうとくう。かくのどくうれいうぶ
の幸福うのうくかくじとくいう。蛾杯よ倦媚ぶるの新婦を待ちこと。
兵賓客のどくとうさんれば園花が兄曾を帯ち。ちくくー奈良くう来ら
ひきとと交参とうんくー。藩中の諸士。赤根親さを伐るうのうい。
却両詠ちふとど。年七いとむうんるうさる行よ軍と花いごうよ足ら

ざる所のれば。靴を隔てゝ舞たを撫くがごとく。又唖子の苦を経るがごとく。ひたに迫れどいひもちゝさゞ疾いらさゞゝ山雞の尾上の月と在明と。對する枕を恨つ。春もすゝ暮ゆくゝ。四月ともうるけてこのゝ秋の日の長に限るれば。のゝ日夜徒に。蚱蜢をわゝ。ぶうゝ立藤と到つ。赤根かれと音のいかるか。ま六の奈良へ出仕しゝく。羊七れ園花ともよ。小生あくと居るゝを焚蟬がそうせしゝうば夜徒に。従者を出居のゝくと行。素内もさちべ見らゝう。半閑なるらたる亮隔を。三隔ぐゝう蛾とゆゝ。女児も皆ちられをがちゝでまセハ紙窓のゝと物の本を閲しく。見ゝうりちべ園花ゝとのほゝうと行りて。行ゝゝんのゝらひゝうれば。ゝうれ夫婦のさゝ對ひ居ゝ。ゝうち發るさんわ。ひゝたるれ呼ゝ。ゝ長ゝ。ゝ長ゝ。ゝ長

[illegible]

[illegible]

[illegible]

を違ひて遍至あへり。父の命も叛ぎ、又彼女子が恩義棄て、件の女子は九才の比荒籠より徇去られて、存亡定なかりしかども、年来の志を轉さんは不義なり。所詮ちからくれ男は要さるべし。父の心を安くし、夫婦の名のきはまるべし。枕席をともにすべき男は、父母より告る。奈良帰を妻とすべし。且つは妻とするとても、その恩の未通ずるに、男は損の。暇なれば殊より疎を著ぶべきさんものとなれば、強顔にありけるこそ。浮世の義理の絆なれば、終より結びも交ぐられ。縁とは諦めぐれ。奈良帰を妻とすべし。一日なりとも、又一日なりとも飽もあれども、別れを離別さるとは信ぜじ。一生添ふことはいかの妻とはなりぬ。諦めぬとはいられんもいと面なれば所なれども、ゆるされぬ恨も散るべ。

輾轉縁談をなしあるよりそのあらん生れんかたもなく毎夜よ。理なるに、しかしなぐ身ありてそのあるべきの妻とはなられば秋なもあるべき憂れ。鹿の奈良帰らんとなくども、夫の家を出ずと思ふよりなる言の葉の露もなぎ乾ぬその間よりなれる飽く帰ることなれば、ふるめらるも。なれなり先よ結髪しへの生死なるべきに、他一妻に取ることもなくとも税まで睡らじと誓ひぬ。その信を半ば多分に禀るべき妾側室に果ると。もさむる喜べ。行りるんをとなる山とその程なれば所なるべきの。情なり。慈悲なり。横の裾。蝸の殺ぬあるべ後方よ夜をあるさへめで。なりの妻と嘆ぐ夫とはなられ。むかるべなり尼法師なるべなるものを。稗なるなるべ宿の素山よりと。商へのひれどのひるべく後女児よ義。後と袖を嚙締る。亮陽越よ敷浪が苦しれ義理と恩愛よ。晋と

女児が誠心を。ゆゆしく思ふよ。忠臣れど。一声俄らと咳よ。けうひする人ありとて。羊七も園花も。猛よ形を改まど。落る涙と泣顔を。給らと。

華陰の備居

浩処よ。あるじ羊六。素良より退て来て。出居の方なる伊豫簾を掲げて。園花が母君りの祖みり訪せ。ひし。羊七いるどと。母も迎ざるとりふよ。敷浪い気ちをんぱ。と。倉の夫て。いる。ぐ身も只今ものりーぐ。皆も女児もいるぐ。ぐ。ぐ。

守傳たまれとの仰せなるぞ。と申えたまへばまたは頭を低。唯そうそく
命を稟。また又後悔に對。ゆゑとあるがごとくうれひ。ともまたは。の
秋の季なるべし。姑さくうてつが死に弱れ女をとりとり其ちんの
いとびとり。母のこと未をもうれひうの園花を奈良に保
ひく。半七が孫なるべく。領をとりとんやとりて。數度の今ほのうに申しるす
もあれどもら便りとなくども。女児ん[illegible]とりあ〜とたびりとなりれた。
[illegible]ら應〜とりんぜう。[illegible]ところ〜へがありよおるでされどのかと
なくんへ。なほ早に。また七が鹿島を目送ら〜さ。奈良に保べ〜園花。
さいとらめどいとくえんへ。[illegible]。女児ん[illegible]の[illegible]もちどいさ懶さ気
色なり。ひくと四五日のうち。[illegible]雜華絡く啓れぬ。半七は園花に別を
告げと男姑に身の暇をもつ。同僚布施今市ふりとも。

君の轎に引そへて。若葉の[illegible]。時は四月の中旬なり。星と
らうる黎明に。雲間をもるる杜鵑ぬるとりとと鳴とりぬ。園花が身にい
ひあへして。名殘をしさと幸意うさに。血を吐ごとり。歎息とりさる行に後
浪は緣由を典侯に告。女児を奈良に迎とりしがひるる日。竊に〜と。半七が
義を守る緣故。夫婦が同答を審にとりて。愛〜とびいその忘の
移〜ざるに感激。又一トとびいぬ。半七がかくるるとをかく〜匿とと。手未さに
ざるにいひとらく。これが孫に。[illegible]が女児の一生を誤とりとりに。腹とこと
いやとせ。感嘆かく〜迫ること。[illegible]。[illegible]の[illegible]。[illegible]
く。女児が久後ぞ。りとりとく。夫とも。[illegible]園花とも問ぐ。
あるとに歎息にあり。宋の。[illegible]嘆息をとりる。[illegible]園花は。[illegible]
うとともに。[illegible]身を焦す。[illegible]の蛍もとられ。六月のこと

吉雄
潜る
浪に
上る
今市善兵
赤松主と

持ちて、しばらく寄り添ひたれば、とく終日臥したるもあり。父母はとれば、乃ち茶炉にたれのみ。さまざまに祈り、祷せども、想ひより病ひ、ますます、醫師もとんとなく、後は常のごとくなりて、一日は起き、一日は外。顔のほそりもはなはだしきはそなはりたまへり。帛君を守傳く。洛より上京、洛東祇園の社頭なる、人の別業を購ひ、こなたより僑居さて、進らせ、統井家の帛君なるなりさなりなり。近臣の名さへ隠して、何某、彼某と稱へ、日未大和、交加せる商人たちにそれを与へるのみなりけるが、と吉雅は、三人の近臣をおくり、下邸の轎を扛ら、割籠をとりて、洛中洛外の神社佛閣、名処古蹟を拉覧して、それより月をみるに、病ひ、ますます、重くなりて、生平よりも、徒らに、奈良より、ひ、ものの、ものの、園花の、病を推して、書輪の寫め、果は、乾鮎のものを、半七より贈りて、安眠もせず、児が書輪より養ひ、消息して、衣服、何らとの、父母より、直ちに、呼え来りぬ。洛の隣の、園なれど、張り、ますます、病ひ、ますます、重くして、何頃か、帰宅あらん。女児は、日数の、西陣の、織物、城殿の、扇などを、贈りて、遣りてくれが、報ひ、もとより、先百、金二、帛を、夫と、典据が、児は、蟻松曽を、帛を、反代は、洛より、上京して、吉雅の、妻を、同じ、所用を、兼ねて、帰京して、吉雅、病愈ての、後は、ようやを、手ようち、住して、諸来るとも、稀なるよりは、七月の中旬より、猛き、寒熱して、假初に、病臥して、遂に、瘧疾とりて、日を、隔れども、起きて、一旦もあらぬ、僑居に、主君のほとり、近く、病臥して、あらんは、畏しとあるひ、今市布施に、相語ひ、吉雅は、少えあげて、別に、立儀して、小氣を

借りて。その外の一人の奴隷を倶して。其処より引後まで保類をその長令市布施ホ吉稚よ密語をすゝめ。まづ病煩ふようを奈良へ告ぐ。花臣ホひりとうとく。別人をもつて。彼よ代をするべし。その人り君のにとりよ稱ぬりのごもよそおゝぶこの風景を殺しぬんり。

瘧病ハ大ゝ三七日を限りよ愈るとのべ。貝くゝめるを奈良へ告ぐ。

でも。某ホ二人かくとあれば。何の障りぬべしと言ぐらくそうとそ。吉稚決ゝ。たゝうりう。終よそのるとを奈良へ告ぐ。まもなくもの。ところをゐさとるふどれも又いくゝ肥もおゝぐ愈べしよ告ぐ。妻も。物をとりとねよたゝぐとゝく。全宋ホたゝくゝいもゝどゝられを全八蝶九郎ぐさよ、ゝの計較ゝく。主君よ盃酒をすゝめたる張本となりよりとも彼今市八王八郎布施蝶九郎の両人ハ焼井藷代の郎賞うれども。その

ぬくよ羊七ゝ宝ゝ宝ゝ下よ勢りゝ。實よ奈良城の児よ相ひと憎べし侯人

ゝり。彼ホハ上よ父母ゐゝ下よ妻子よくゝ。只言を巧うと君を欺ゝ。

飽きて媚ゝ。傷難をとゝうゝ。夫信言ハ美ゝぐ。美言ハ信ゝぐ。宜

ゝり侯言ハ。耳くゝたと蜜のごゝ。吉稚先ゐ年少軟弱の公よゝ。

られを慮らど。彼両人を寵ゝ。二ゝられのとゝり。因ゝ一度の従者ホ

も擇ゝ上ゝ。却ゝ七をりぶゝゝ人気をるよゝ。ゝ七猛ゝぶらゝ。五

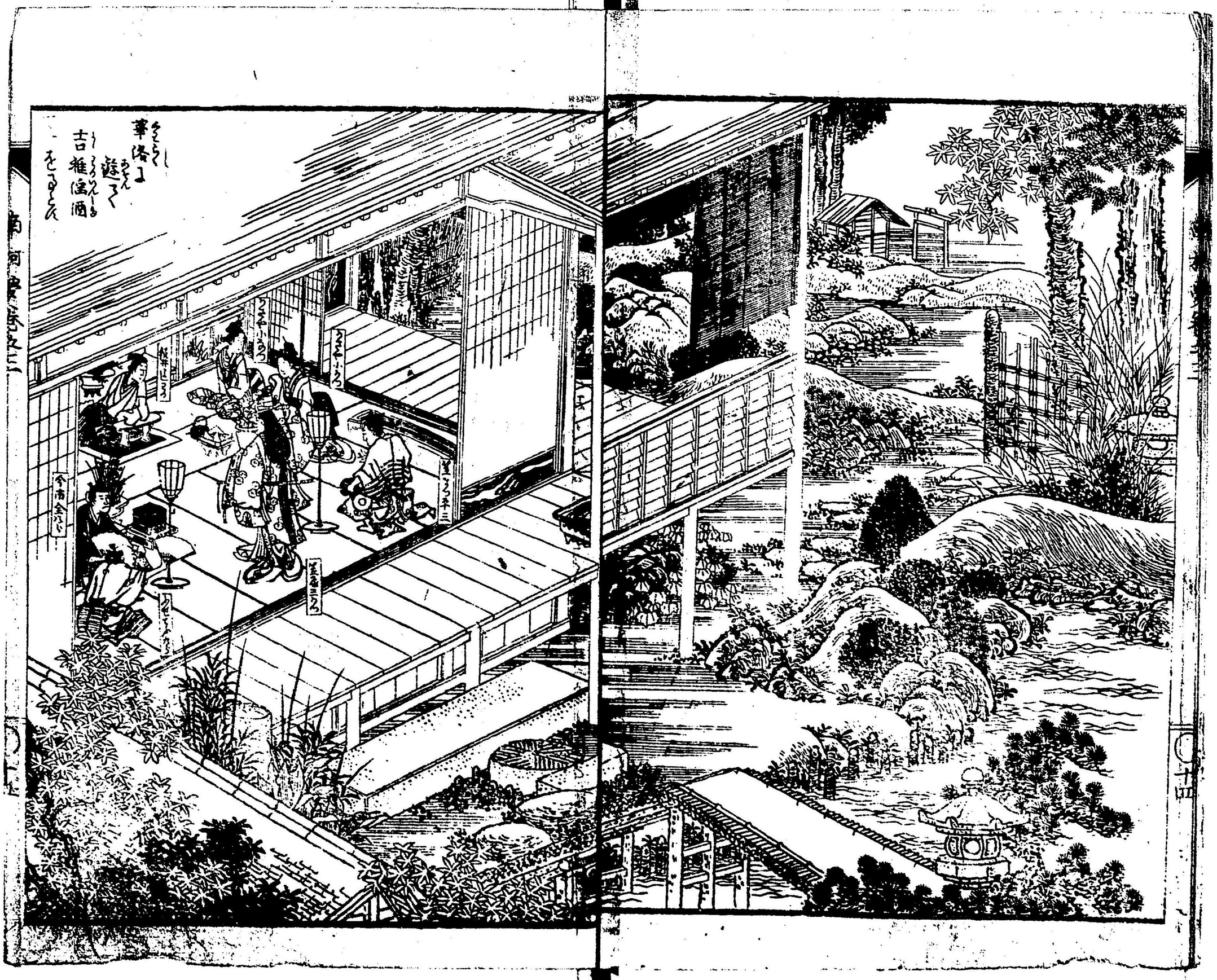
後の張宿よ退ゝ上ゝぶ。全八蝶九郎ハ魔をゝ。吉稚よ拝奥を

すゝめゝハあのれゝゝぶ外の樂よりゝ。剃ゝめゝろ。後よ名ゝゝる者ゝ矢

夏ぶ共児の小夏。家子の三勝うんど。夥ゝび集合ゝ。昼夜酒宴よ行ゝ

するゝ。ゝて三勝ハ。光の中ゝる光ゝ。ゝ上ゝび笑ぶ。城を傾るの美人ゝ。

されぶ文業よ形容ハいゝの奴王仏ゝも勝るべく。愁を含ゝ


桜井にろ
今市金八
吉雄三ろ

を。雨の降襲よ春の鳥の鳴がとく。亦已故郷を慕ひ沈田の荒野。父
を索ねたりし。鎌倉の微数とらのともられの不及とえ〜りぶ吉雄
僧よ春気〜て。古し悲しる気をするを金八蝶九郎を尋て猪〜て。
言の叙よ主君よ私語まし。かのれら媒つまるべ〜と。聽と三勝
よ。そのら〜をらひたる〜〜ざまよ嫌〜誘へども。三勝ハ辞〜ことをとれ
結呉る夫よ遠ぶん。寡婦よ果るを果るんどとひ定めしりまるれば財産
死人ともあ非ぶ。又見流士もえうりらべとぶ〜金銭ばかり〜挑こ威勢
よ乗〜〜遍る人の席へいふ〜ぶ来たるまるり〜移よ〜〜侯人ならが。
主君のかよ情を述るをまる〜。うち腹〜そ。一言の意よもなどそのの
席の果るば〜ぶ〜ぶ拾頻〜〜〜〜〜〜がその後ハ遂ども絶〜
来たる〜ぶ金八蝶九郎ハ。りんよ違ひて〜ひんとぶ〜られど。彼ハ

る。主君よハ。翌の夜あり〜まべ〜と〜〜〜るまの已ばる〜と。三人
密まよ後合〜〜らのるくハ鞍の金をかく。三勝ゲ身を贖ふ〜り双を
〜とる。猛よ典籍ば方へ書簡をあり。用金のまをひ遣〜ね嚮り
米七ば五條よ退れ〜〜〜り士雑の性真よ費ひ〜金ばくのまあら
ぶ或ハ五十金。或ハ百金。彼のまよひら〜ぶ〜ハ良〜り〜
るまよ。米七ば名を書加るとハ〜ども。その人ハ後〜〜れを〜ぶ〜吉
雄ハ。今備所〜〜。〜〜〜〜〜〜

まづ時を門ろく裡より入り。蝶九郎は外面より立在るの客子を張ひ。時宜よろこび共より平三を親伏んとて。その頃全八郎はあとより對へ。てしの者。俗は世る憚ある猿うんが。主君の名はいとゝとくれと三揖する愛ちばとのあり。牙を贖ろ。傷妻よせんと宣とるをきりろ。ものるに相語んるよ来まり。牙價はそうとうとぐ。舞ろの牙をみるこよるに侵倖うれが。領兼保畑めぐうどとの平三はゝ呼ん。某女児よ舞くはいさきそれど。伊猟ととうを賣ろ。牙の安楽とあるのふのふのうどゝやとのるに三揖よりひちるとも。彼よ、結髪の夫おうと。悲金石ろり堅。めまぶいとるを益ろ。是をでいくらびろ嫌をりろくおうぐすちるるをいはせ人めれどもが兄を兼りどれを聽ぞろ。回巻ろるる斯の如。この外よりべたるぼぐたるぐ。ちろくゆりあくとしひうけて。つと奥よ入りしぶ。全八郎呆果。をしわるろく外面こ出ろ。蝶九郎まちぐのうを告るよ。蝶九郎は既を撞つるるもよ物蔭よ到りさくりうとんといふよ。全八声と低。彼平三とやうんが。憎さげよ回巻ちんぐ主君と続井の郎君とちるる友よ。ちひ係るるぐ。さればとろ主の名を明白ちちを。ぐ。所詮ろりの三揖を奪ひとろ。さて嫌をのろ。牙價をかろんよ。彼ハえ来俳優家ろり。トちひ猿をんがりでう点ぐんさんめるぬ。うとりくば。蝶九郎つぐとけろ。ちくりとらくぐる人のちちる量ぐ。彼り兼引ど。又うけ引とりくるる。その望数千金ろぶ。元を吹瘋を来るよあるどやとりくを。全八はなのくど。迎りろぐろ肚裏を精せどぷ。頻ろる三揖をとろ光ろ。郎君よ假托ろ。平意と遂んとろくぐろり。かりくハ面ろ二所行ろ。あの是三揖ろハ命も惜とん。

今彼を牙贖しなん。命君に進ずるに、世の中えを憚まる大和へ
はるばる行かんとて。その用意の時よりしめりて。妻とちんすれば。今ちぢ
が祝ぎ。れ辺又これを助ける。この件のすず朱鞠ぢ。昨日奈良へいひつる
たる用金ハ。とぐてその懐へ挟み。故ひとりとうまぢ。途中のどに埋伏
して。彼女子奴奪ひそうんに。誰ならぶ仇の而るとちうんちぐ。されが名
價をそうとるに及ぶ。ようや平三これを殘るく。女児をこの後さんと
聞とる。這奴を縛り出す。撃殺えハらと易と信ずちく密語
みぞ蝶た命ちに教びる。一張ハ及ぶ。かくまぐうんハ黄金まるれ辺ハ
又英人と得ん。いづまも劣を捜りうる。この線密く妙くとらハ。借而ま
走乗めた・る男。忙しく走り来く。平三が表まは門の長ハ管領晴元
朝臣のぢん使ける。今夜猛ま。賓の来をるありてうく三拐を衣せと

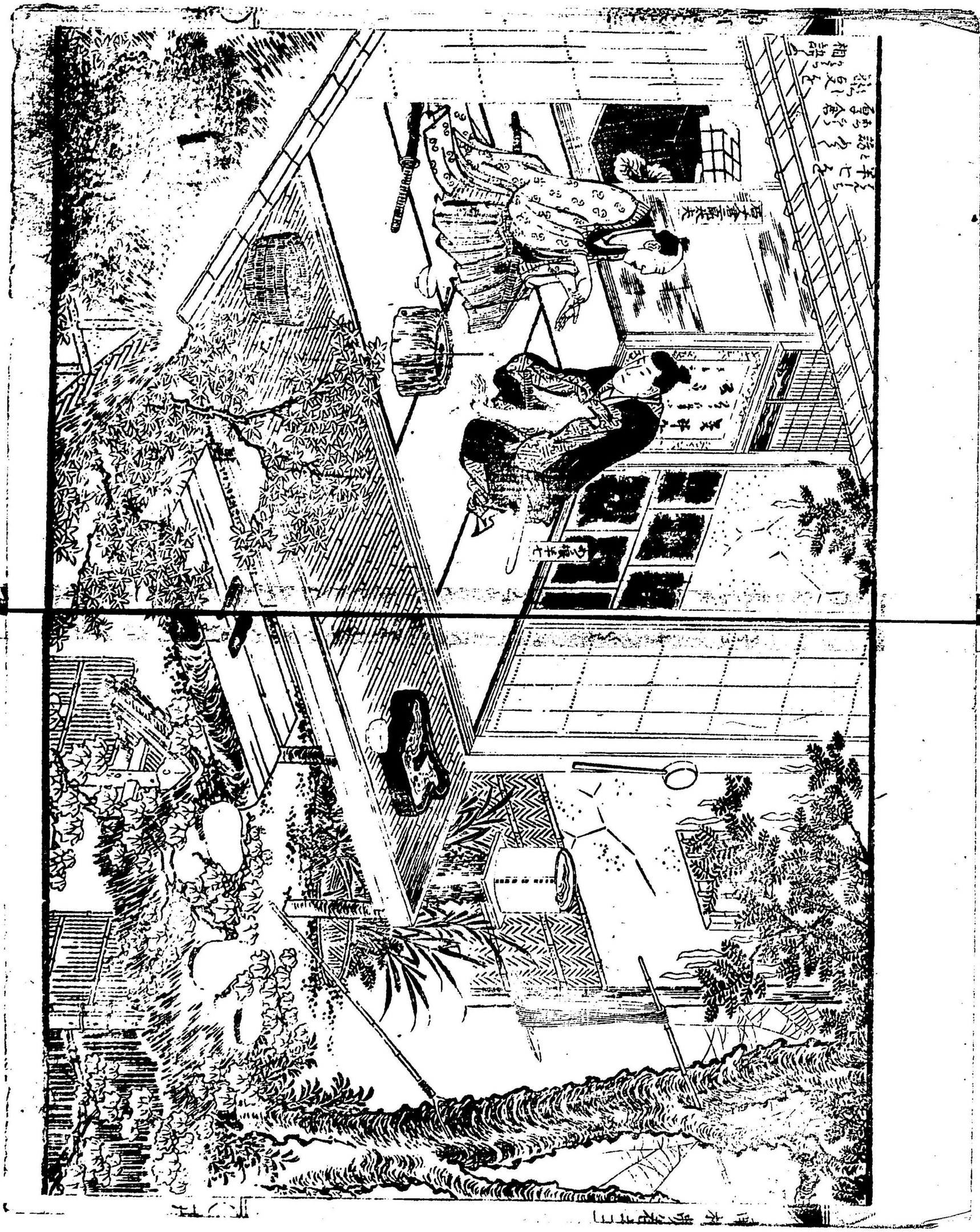
宣ハ。黄金ハ。頃。連の轎を出ずるに。雀躍ぶ。
しひ果てて。又忙しく走り去る。代入モ。蝶九郎ま密語く。物蔭こりを抱ぐ
出矢庭ま彼男が頂髪を掻廻ぐ。ぐちば走京ハちま結馬を。ひとり一声
しハちもあくど。咲をいさく締るまま足を両膝を晴をちうさまー
怠地ま息絶えりてのちを蝶九郎も走り土くく散乱ぐ衣服袴を
剥とり。二人とくく。屍をほとり近き。叢の中ま投入れ。くく躲し。
後をもえぐく迹をぬ。ちのちを平三ハ管領家ちり居ることをいん
ちく。三拐ぐま舎まあり。往来の人を驚絶る術ぐんばかりとるるめ
うりしとそ。

疾轎の驟雨

さても赤根ぎ七八。五條の旅宿まありて。病と三十日まおるる頃日

全八幡左郎が郎君を奥をさめまゐり。殿の葬ふ事はじめ集合
るゝ人々行ぶ。大ゝ驚たこれを練人とこるを。氣力なくして記居
る。ゝ人を手ぶ頻をゝ焦燥へ。ゝ日を過せば八月の
中旬に至りぬ。翌日つとめて髮を撫し、祖園の旅
館を出りぬ。ゝの為体をゝ人々涙ぬらし。文和
へ音耗をもぎれべとゝ。この旦奴隷を奈良へつかはしゝ
云繁敵もうた宿のゝ。徒然を慰ぶ。ゝ求ゝ。ゝ
ふ圖扶を想る護身囊を。
護身囊は母の送云ゝ。護身囊と送代こゝ。
ありゝぶこれも愛を似ゝ。ゝ田の宣いゝ。彼が成長の後俗へ上る
ゝ。ゝ母を棄ゝ。

れども。ゝ母はゝ愛を在ゝ。ゝの近屬侍をあるゝ。問ゝもゝを
その人れ。ゝるゝの愛をありやゝ。紀念ゝ。今は他れゝ
蘭をありゝんりのをゝ雅がゝ。ゝ護身囊と。愛ゝ
ゝ。ゝんゝ頂を德る。ゝ。ゝもあを外面を咲ゝ。ゝ。ゝ人ゝ。
金の鍔ゝ人庭のゝ菊もけゝ。野袴の裾ゝ。ゝの玉を時
し。法ゝ戸と押ゝ。笠を捨ゝを人をゝ別人をゝ。
厚倉三郎大夫友春ゝ。ゝ七ゝ端ゝ出迎ゝ。ゝ倉氏。何
ゝのゝ坊ゝ。ゝ。上座を清ゝ。厚倉對
ひゝ。其舒の病云ゝ。ゝ顏色を
今ゝ年愈ゝ。ゝ。ゝ七苦ゝ。某ゝ時
瘧病ゝ。起居を自在ゝ。君のゝ。ゝ臥ゝ。



されこと[illegible]。この所より退た。翌八愈んあさとハおもうう果んうう。宿者へも学えあげど笑ふ告ぐ。そひの外ふ日をふうう八よ笑ひひる。少と不審ふことしそのとた厚倉声を低うし[illegible]ふをどうなるあん故あり。近曽吉雅君用金のふ。近臣三人の連署をひ[illegible]ぐ[illegible]ぐ[illegible]を大殿ふ[illegible]怪[illegible]。某を[illegible]伝密ふ洛ふ到りて。ふの為体をふ[illegible]奏ふと仰せ[illegible]。のある月の下旬ふ。この城ふ来ふ[illegible]。をふ[illegible]逗留し。全八螺九郎がをくめふ[illegible]。郎君かあん彷徨ふ[illegible]ど。毎日ふ殿の舞[illegible]を[illegible]。三勝とやふん[illegible]と贖ひふれ孤妾ふせん[illegible]ふ[illegible]。殿の金を進ふ[illegible]。例の連署大形く到来せり。匿ととれどもふ[illegible]。[illegible]ふ先ふ。大殿へ[illegible]ふ[illegible]。ん憤ふ[illegible]て昨夜

猛ふ二郎を夫を[illegible]。頃日伝ふ。吉雅がふ[illegible]問ふ[illegible]。[illegible]既ふ彼ふのふ偽楽放蕩。世ふ[illegible]。ふ審ふ説ふ[illegible]。のふ[illegible]室町家ふ制度あ[illegible]が家門の滅亡踵をめ[illegible]。[illegible]。汝ふ[illegible]洛ふ走ゆ[illegible]。吉雅主従をあ[illegible]。[illegible]を初ふ[illegible]。後の禍を攘ふ[illegible]と宣ひ。[illegible]気をあ[illegible]。そひふ[illegible]。[illegible]辺ふ病臥ふる。[illegible]。ふの魔ふ素良をふ[illegible]。目八[illegible]。[illegible]ふ[illegible]。[illegible]ふ行跡ふ[illegible]。[illegible]ふ[illegible]と又ん。郎君の[illegible]を[illegible]。ふの才病ふ犯ふ。諫ふ[illegible]。用金のふ[illegible]于ん。某絶く[illegible]をふ[illegible]。さて[illegible]今市市旅の接人君ふ偽酒をふ[illegible]。[illegible]

く。不忠の隊に入る歟。彼憎し朽をしく。歯を切く憤ましば。厚食の
さるく。其許の姓名を載さるとりくるる。件の連署一枚もれ辺の自筆く
とえねばりひとくに擦めるべし。只りひとそぐこそ。郎君のゐん悞う。
これを赦ひえたくゐんかハ。忠臣その越度よかろう。若肉の計をうさで
ゐるるど惜うゐゐんをくハありるぐ。その人をはどとらくよ。まセ
笑めくど膝とすめるハいるる謀ゐくりぞ。某ゐを新く
代ゐ等るべし。そやく説ましゐく。もうしくとりそがやべ。厚食莞
尓ところ笑くゐれ辺ハ志ゐに勝りる。忠孔子二るるゐハるれるく
ちるが流ゐ。実ハるが胸中の苦計を背くゐるゐ行せんゐに来れる。
さハらくるゐ。ふ忠ふ義の汚名を厭ひそゐの謀をはんぐと。かくて
るるるゐ不ゐ狼ひゐゐべたるる問ゐまセ昔ゐりるる謀ゐ為ゐ。

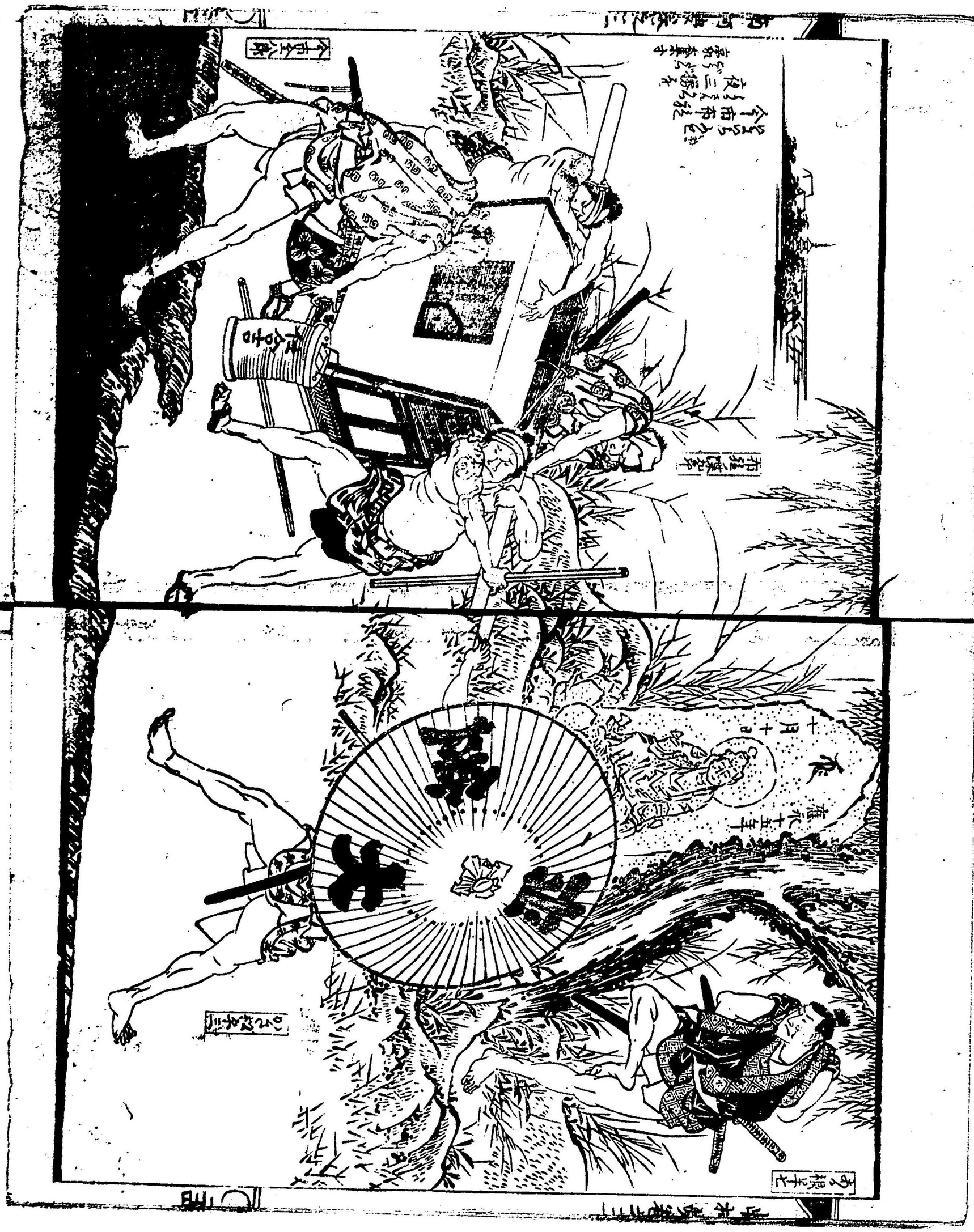
ゐん悞をるが永ゐ負ゐ。君を赦ひ悞ゐが。不義ともりく不忠ともりく厭ゐ
ハ奇忠ゐるくど。と義ゐ勇ゐ日本ぐるるひふ。厚食頻ゐ嘆賞しそるくば
今霄いるふもして。三勝とやくんを尊ひそる。いう地へるるも立退ゐく。
るれハ又夜の中ゐ帝君のゐん供しくく。茶良へ殺りさくく大般ゐるるんゐ。
ゐ猥縁故を乳明しくゐが。唐雅君のそるるゐるるゐくばどぐるくま
せが私情るる起りて。三勝とりゐ舞ゐゐ惑溺しるる雅君ゐ假托んと
較計しが。既ゐその使価発覚ゐ。ひひとくゐ言語ゐ。猛ゐ件の舞くを
ゐるく是電せる。かくく登据分明ゐるれば一旦のゐん憤を散されれ。又子和順
ゐ忠ゐるば。パム私の幸甚しるんとゐるるるるるとハ。巻弦街頭恵地
その趣を更ゐ。帝君のゐん悪名を雪もぐく。帝君ゐるる紛速を慎
ゐひる。若家泰山のゐとゐゐゐ至るんるるれ辺ゐ孫忠ゐあり。ゐくるる

あれ年を経て。その便宜を見あり。所辺の太義八二郎を夫に命ぜ
さ。ゆえあげ。めぐ〳〵る為糸さ〳〵そうさん。ぞうゆめ。と説示せべ。まセ
く感激。この謀ひひ易し。只うけがさたへ。彼舞〳〵を奪へ。一日く
とも。とつ上注ぐべ。真の不義を仕〳〵懐〳〵。是丈夫のぞろ所業。
不便ぞ〳〵さ〳〵教。それ又遠ふその地を去〳〵。自教ぞべ後の患もあ。
皆是太義の為あへあれど。罪ぞさ女子に教〳〵る。まセが命を捐ぞへ。彼
女子の親族も。恨るぞ〳〵ぶぞ〳〵ぐり。とりひも果ぬ厚倉へ。況を右右
よ〳〵ち掉ぞ。赤根氏の言違へ。彼も又人の子。ぞ〳〵ぞ〳〵ぐんを教ぞ
べさ。ど〳〵れそれを傍外さ。不便を〳〵えぞ〳〵貪〳〵ぞ〳〵ぞ〳〵ふ
世を渡ぞ。とのるのあへ預ぞ〳〵ね。三拶親子を引放。憂を人とる罪障を。
贖んぞ〳〵ぞ〳〵の不為るを見。〳〵れ又方便をめぐ〳〵て。彼が身價を外

ぐ〳〵。平三とゆ〳〵んを〳〵ぞ〳〵ぐし。血気を楽し〳〵人を教し。親を
失ひ〳〵ふ〳〵ど理を述ぞ。ま七を〳〵ぞ〳〵引ぞ〳〵ぐ
〳〵ぞひ〳〵ぐ。ぞ〳〵ぞ〳〵に至ぞ〳〵已ぞ〳〵ぞ〳〵ど。ぞ〳〵ぞ〳〵昔ぞ〳〵ぞ〳〵を。ゆ
〳〵ぞ〳〵ぞと寧〳〵ゆ〳〵。某稚〳〵し時。[illegible]ぞ〳〵れ女子ぞ〳〵ぞ〳〵の
名ぞ〳〵べ〳〵ぞ〳〵んとゆ〳〵びぞ〳〵。ぞ〳〵ぞ〳〵が又ゆ〳〵八再生の恩あ〳〵りの。不幸ゆ〳〵
九ぞの名。ゆ〳〵へぞ〳〵ぞ〳〵どぞ〳〵ぞ〳〵ぞ〳〵

めとおぼされて。老たれば。便うれて。又は六ヶ敷を。ゆるされよ。
なるべしとまを。膝よ。延出孝を。神も仏も憐て。端ゝ奇しきこと
の人。三勝ハ結号せ。おさんこゝにちひもうけど。親ゝ三人もあれ
こ。厚食ゝ。縁故を。ゆくゝハ。孫んやうもうゝ。比丘尼ハ壯士。儒衣
を被せ。令下さく。隕さるゝ。ゆくゝ。勝うゝ。ゆくゝ。
昔の短くゝ。鶏も塒よ入相の祇園精舎の鐘の声。ゝ耳も
あゝなり。既よ時刻ふゝり。ねゝ。原倉を生を。さを
えゝりゝ。ゆくれゝや退ゝ。ねゝ。孫ゝ
損ゝ。ゆくゝ。とゝ。ゆくゝ。ゆくゝ。
彼瓜を。徘徊し。潜ゝ。ゆくゝ。
懷中よ。埋伏ゝ。ゆくゝ。ゆくゝ。

月の天の定めゝ。ゆくゝ。ゆくゝ。ゆくゝ。
が影二ツ。磨あげゝる武士のゝれや。鏡といひつべし。ゝの日今市金八郎
布施蝶九郎。既よ謀を定めゝ。管領家の支卒を繼仕し。直よ
その瓜を。ゆくゝ。ゆくゝ。日来憑人。ゆくゝ。ゆくゝ。
ゝ悪棍。金を。ゆくゝ。ゆくゝ。ゆくゝ。
ハ剥ゝ。衣服袴を被ゝ。伴の者卒よ。打拾。人の悪棍よ。橋を
待ゝ。笑ゝ。ゆくゝ。ゆくゝ。ゆくゝ。
ゝ。ゝの。ゝ。卒三ハ。真葛原よ。ゆくゝ。ゆくゝ。ゆくゝ。
ゝ。ゆくゝ。迎の橋。ゆくゝ。ゆくゝ。ゆくゝ。
駆ゝ。ゆくゝ。ゆくゝ。三勝ハ夕間暮の。ゆくゝ。ゆくゝ。
ゝ。ゆくゝ。ゆくゝ。外面よ立出。門の戸。ゆくゝ。ゆくゝ。



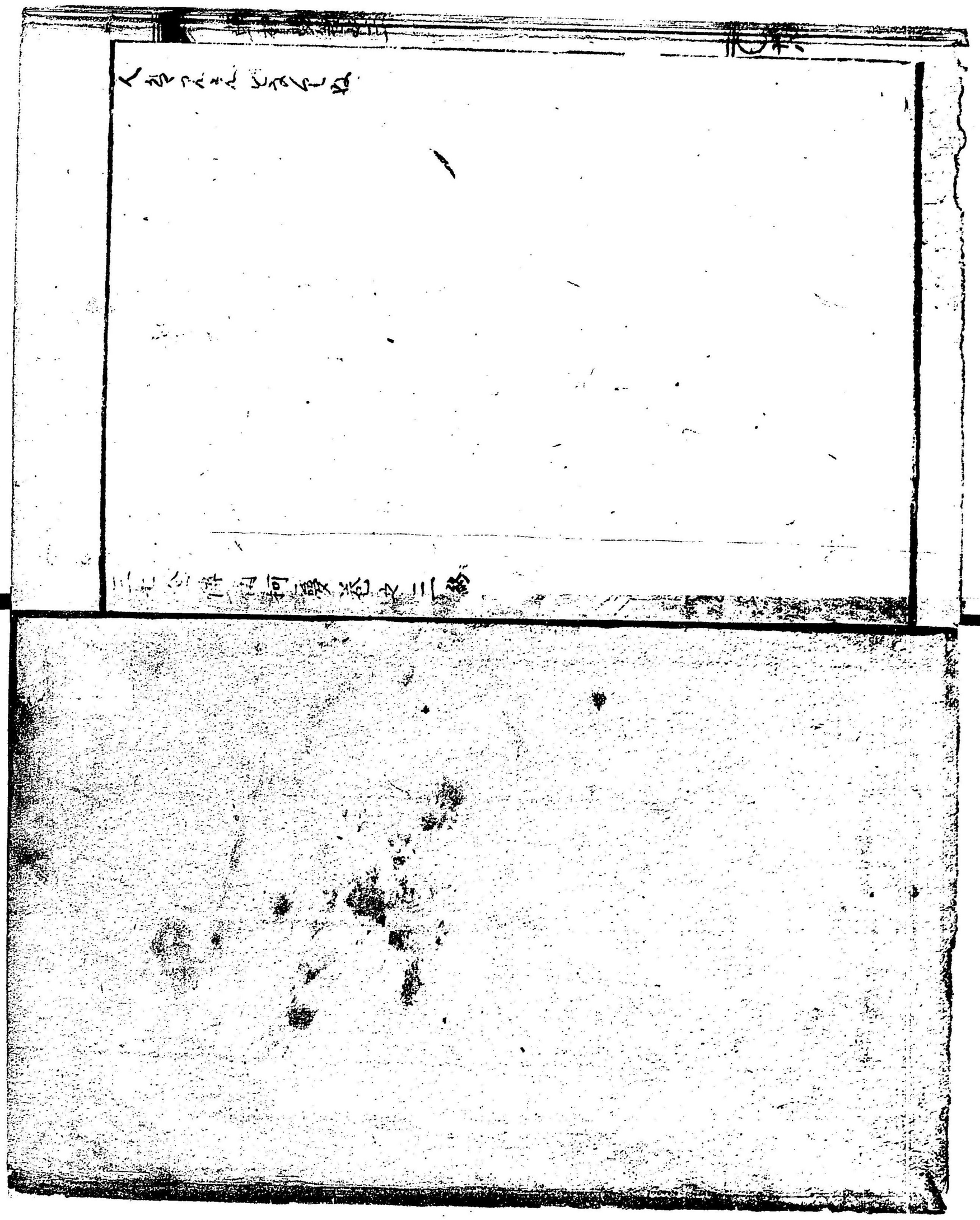
家よりくゆる。如此くあくあるる。今はもあるとなのくりあるる。
舞の衣裳へ。跡ようりくーあのへいねと言ひあしてよと。跳あを。
聽くくー橋よ案授るを。行もあくーせどど足平腑平。うう府へ見て
樓出ー。只ふ信ーくくー走走よべ。蛟九郎へ鄉ようり物蔭よ立俵
ようる。全八と面をあう。俵俵くーと私強あし。橋よ引ようる
祈ーくも。平七へ中ー三勝が家を見當と入ようべ門へ須ーくより。
隣よる家よ立くりくー。それがゆきぬる方を問べ。主人東の行面
を指ーくー。見ゆくへ三勝へ。目今人よ拾ようくーゆくくーなり
あれ入ゆく。彼方へゆく。桃灯とて。彼が家くる橋ようと笑ようあく
どー。ま七佶と入くりつー。それやつくーいといひくくー。赤がくくーよ追
来ようー。ようーくる怒よ。平三へ。とあ日管領の美平が家ーー後猛

真葛が原へあくーべたるよ出表ー。申ひ刻ーくり甚遠よ動ーどんのはくり
時をちんのちーー行よ。ペらへよ。三勝が茅屋家へ。ようる沈及ようくんとー。
呉顧よところ焦燥。香ひが良を嗅ぐーー。三条行屋と走りゆくー。河原
を東へいそがする橋の肉ようー。平垂ひたる振袖を。挑灯の火光よ入れば。描ー
大の字の物箱ーー。紛ふべうもあーれ三勝ようりあるる不審ーーーん。
輪夫どもが為体も。何と平ん怪ーーれよ。引懸くる走平へ。昼入ー衣服
を剥くんどーその人よへへくーー。今一人。拭ようくーー面を裏たる武士へ向ー三
勝が者成償んとー。ようが家よ来たりしーよ似くれば。矢庭よ橋の持箱
個ぐ。二ようの二ようの押戻ー。ようーー女児を折ーーへりおとくーーー。ー同れー
四人ようーーーよ。驚くとーーが。史ーーもさーーーー。向ーーーーー。管領ーーー
さくー成。ーれーーーと叱ー退ー。ーーー去らんとする成平三へはーーー

く。一歩も運ばず。首領へ云さくうぬが路を遮ぎれ。を御ま
いらとべーとのひもあくど。取る持端引めぐるとべ。蝶九郎ホ大よ怒く。
と過言ゆり雅藉く。這奴息の根とめんと圓るぞ。轎夫ども轎扛
居。打くるる息杖を平三内をとの階を。右と左へ打ちぐるつとうけ
入りく足平が。息杖を奪ひとり。諸臑雑く雄くるる。小溝へ撲れ
と打倒し。這あぐらんとするところを。ぐるぐり。縛くあるる脚平の脚さらいくい突殺らん。の呼
と叫く仕迯殖を今市び駿れうぐ〜声をもうんど抜打。切らんとす
る刃の光よ平三くく身殺及く。息杖をりく受とめ。追んくしつ砕む
ぐ。折しも降来る張雨よ。蹴揚の泥の赤長裳ぐも迎んを刀
風ゆり蝶九郎ハもの隙よ。搦の蓬ヵ撞揚く。三勝をし出し。よ武を

ゆ。ひけ進んしすゆ。ずもくさ三勝をとの
刃に追慕来ゆしか。岸の柳よ本がられく。るも容ゆいくらく
つ。吐嗟と忽ち跳て出ぐべた前よ立ゆける蝶九郎いるもわけ
どきてゆ遮留られ。ろい中大よ瞰。逃ゆも脱さとらしゆ
ゆをゆどど三勝をうち捨く。折くるる刃のトずもが堀圓
拳をて下と働ぐられゆ膳をいくおし。眼瞳くくりを捨ゆ
と倒るを。平ぞんん面もぐ。駿れくるる三勝を腰下ゆ
楚と扛抱れ仔負よ。添くを走ゆり。平三も全ハもらの景迹よ勢ひ
脱。迹よ呆れく打もぞど。双方一度よ引ゆんゆ戻らと呼ゆ声
見いさぐゆ。蝶九郎が耳よ入りん。分ぶ起のぐり。仇も身方
玉鋒の路さくいとぐ暗けれべ。徒跣を索めぐをどもくとの

右羊七忠義
途小三郎を
熟ム
布施弾九郎
今市全八郎
根羊七
笠屋三勝
左
雪を奮と
羊三
今市ホと
戦ム
笠松平三



122
17
24